

『内在-ひとつの生』ジル・ドゥルーズ

①超越論的場とは

・非主体的意識の流れ

※超越論的・・・経験を越えた真理・実在についての認識にかかわる、くらの意味？

超越論的经验論は、「経験を越えた真理を経験すること」か。→潜在性概念へ

※超越論の主観ではなく、ある空間を設定するドゥルーズの好み
例<スパティウム=強度的空間>内包的空間『差異と反復』

②意識の限界

- ・しかし超越論的場を直接的な純粹意識であるとしても確証は得られない。
- ・意識は、主体と客体が「超越するもの」のようにして現れるときにしか事実としてみいだされない。
- ・意識と超越論的場は外延を等しくするが、意識によって超越論的場が明らかになることはない。

→我々は判明に意識するものについて、当の意識している対象を現実的だと感じる。
意識が判明であるのは、その意識が始まりと終わりを持ち、主観と客観に分かれているから。
主観と客観に分かれていない(意識が超越的なものではなく、内在的であるとき?)とき、意識は判明でないが
至る所に拡散し、無限のスピードで動いている。そのような意識の流れは超越論的場を横切っている。

例)写真と映画(写真→主客構造、映画→流れの中に出来事がある。内在的)

③超越論的場=内在平面

- ・純粹で絶対的な内在は「それ自体においてある」
- ・内在を主体や客観と同一視してしまうという二つの錯覚がある。
- 主体と客体は内在平面から脱落し、超越論的主観や高次の単位としての客体に内在が帰属させられてしまう。

※ドゥルーズの考えでは、内在平面という絶対的な哲学的=概念形成平面において、
実体や様態や主体客体が概念として生み出される。？
『哲学とはなにか』内在平面は諸概念の生きた質料(マチュール)である。「哲学とは何か」p146

※それ自体においてあるという表現・・・スピノザによる実体の定義と似ている。
しかしスピノザの実体は内在平面そのものではなく、逆に実体が内在平面に属している。
スピノザの実体は絶対的に内在している(存在の一義性etc)と言っても、内在平面そのものとは言えない。

④内在=ひとつの生

・「純粋な内在は(ある特定の?)生への内在ではなく、何の中にあるわけでもない内在的なものが、それ自体ひとつの生となる」

「ひとつの生」の意味=非人称的な生、意識を外に向けず、誰のものでもない生の中で安らっているような至福の状態?

※スピノザ風に言うと・・・ひとつの生とは実体の秩序から産出される存在し理解する力そのもの。個物の特異な本質。

※フィヒテ&メーヌドビラン・・・主観客観構図を越える根源的なものを意識のなかに見出した

⑤特異な本質、ひとつの生

- ・ひとつの・・・超越論的なものの指標としての不定冠詞one[une]
- ・非人称的で特異な本質は、純粋な出来事を開示する。

不定冠詞「ひとつの」・・・もはや見分けることが不可能で潜在的になっている状態をあらわしている?
特異であるひとつの生とは、特異性という此性をもつが、もはやだれのものでもない生のこと。

- ・此性Haecceity・・・個体化ではなく、ある種の情動等においてそのものを他の個体から際立たせているような本質。
<スコトゥスの用語

⑥出来事と偶発事

- ・個人の生は経験的な決定因から分離されることがない。
 - ・反対に、ひとつの生は内在的・特異的な決定因から分離されることがない。
- 諸個人の生とひとつの生は共存しているが全く別もの。

例)一般的な(個体化された)体験・・・乳児の出産、育児、教育
特異な(内在的な)体験・・・乳児の笑いひとつ、しぐさひとつ、という体験
※特異な体験は何物にも代えがたいという印象を与える、と言える

<ひとつ>という不定冠詞はつねに多様体の指標である。すべての出来事にとってのひとつの出来事

⑦潜在性と現動化

- ・ひとつの生は、潜在性、特異性、出来事からなる。
- ・潜在性virtualiteは十分な現実性を持つ。⇔単なる「可能性possibilite」は現実性をもたない。